書評

田中日佐夫著『二上山』

田中文雅

○

日本固有の諸習俗が、外来文化の影響で種々様々な、変質の相を呈してくるのは、歴史的必然である。日本古代の葬送儀礼が、仏教文化との接触によって、或いは政治的要請によって「哭」「誄」から、天武のあの荘大な殯宮儀礼へと変化し、更に聖武にみられた仏式葬送儀礼に定着したのは、きわめて自然な変遷の姿であったといい得る。

近年、この葬送儀礼の問題は、各方面から取り上げられるようになった。万葉研究にあっても、「挽歌と哭」「挽歌と誄」「挽歌と殯宮儀礼」といった視点から、挽歌のになわれた場を、正史に記された葬送儀礼の中に位置づけようとはされたが、葬送儀礼そのものを研究対象とし、その実態の再現や歴史的変遷の相を問題としたものではなかった。たとえば挽歌のになわれた場として、殯宮儀礼を考え、天武殯宮儀宮が分析される。そして僧尼の参加にみられる仏教の影響が指摘されても、その後、どのような仏式儀礼に変貌していったかという問題はたどられなかった。「哭」「誄」といった古代の葬送習俗は、その後の葬礼の中で、どのように変質していったか、万葉集に至って、始めてその姿を見せる挽歌は、如何なる葬送儀礼の伝統下にあり、どんな実修に支えられていたか、等々の問題は、我々古代文学に親しむ者にとって、常に解決を迫るものとして登場してきている。

このたび田中日佐夫氏によって上梓された好著『二上山』は、我々のもつこうした問題に触れたものとして注目される。本書で取り上げられた葬礼に関する儀礼、実修は、「哭」「誄儀礼」「葬送行進の柩を引く儀礼」「墓誌銘」「伝」「当麻曼荼羅」「住生講」「迎講」「来迎講(練供養)」と非常に多岐にわたっている。そして、

○古代の「哭」に始まり、現在の「来迎会(練供養)」までの儀礼を、歴史の流れの中に連続するものとして位置づけた事。

○正史に記されていない「柩を引く葬送行進の儀礼」の実態が再現されている事。

○「誄」との関連において、「墓誌銘」や「伝」の成立、流行が論述されている事。

○誄を職掌とする当麻氏と、氏寺周辺の検討から、当麻曼荼羅と呼ばれる大変相図がまつられた事情、又その信仰形態の変遷がたどられた事

など、数多くの論述があり、その中には、注目すべき多くの創見をみる事が出来る。しかし本書の特色は、「地形と、地理上の必然性(筆者注・遺物、遺跡、遺構、地名の検討など)のなかから」(四頁)古代葬礼の再現と、その流動の相を把握しようとする方法論にある。この二上山周辺の地理と、その地に居をかまえた氏族のあり方を通じて

究明されるという方法論は、本書全体に及ぶものであるが、特に文献史料の不備な葬送儀礼のにない手「柿本氏」「当麻氏」の考察や、飛鳥時代の葬送儀礼の再現には縦横に駆使され、本書を一層精彩あるものにしている。以下、著者の論述とその問題点などを簡単に追ってみたい。

○

第一章では、二上山西側に墳墓のある孝徳天皇、推古天皇などの時代をはさみ、倭の五王から大化改新までの時代素描と、その墳墓形式が語られる。そして敏達朝を境として、墳墓形式が変化することに注目し、儀礼の統合を迫られていた敏達期の政治事情の検討から、墳墓を支える背後の葬送儀礼そのものの変革を予想されている。

第二、第三章では、「哭く」という葬送実修の意味と、それが敏達期以後の「誄儀礼」とどのように結びつき、更にこの「誄儀礼」が、時代の変遷と共に、どの様に変質していくかがたどられる。

まず「哭く」という事は、未開習俗に共通の葬送行為であり、こうした未開の諸行為が集中し、儀礼内容が整備化され、「詞」の使用によって成立したのが敏達朝の誄儀礼であると結論される。そしてこの誄儀礼を、三期にわけ、第一期（敏達から大化改新まで）は、二上山墳墓群の時代で、儀礼が最も主体性をもって行われた時期、第二期（大化改新）は、舒明、天武の殯宮儀礼がそれに相当し、仏教の影響があらわれはじめた時期、第三期（持統から文武まで）は、儀礼が仏教寺院の手に移り、仏教儀礼による統一の行われた時期、と各々その性格付けをしている。

初期の万葉集挽歌を、単純な抒情歌であるとする見解から解放し、葬送儀礼である「殯宮」に歌の場を求めようとしたのは、折口信夫（『万葉集辞典』全集六巻）が最初であったと思われるが、この見解は、武田祐吉（『万葉集全註釈』二）、西郷信綱（「柿本人麿ノート」『日本文学　昭三十一・一）、山本健吉（『柿本人麿』）、吉田義孝（「天武殯宮の文学史的意義」（『国語と国文学』昭三十九・十一）などの諸氏によっても支持される。しかしながら「挽歌」の名称が記紀になく、万葉集に突然姿をあらわすことなどから、その性格、実態の把握には、常に困難があり、「献呈挽歌は殯宮で歌われたものでない」（『万葉―文学と歴史のあいだ』所収）とする吉永登の説などもある現状である。こうした時、誄との関連から元の挽歌を、殯宮を離れる際、また都から埋葬地まで柩を引く儀礼でうたわれた歌であると規定し、その信仰的機能を、霊を斎き、治める要素と、死者の霊に働きかけ「治道」として働く要素とに分析されたことは、きわめて新しい視点から挽歌の本質に迫る注目すべき見解であろう。こうした見解と、更に挽歌の歴史的変遷の相が第四章でさぐられる。即ち、万葉挽歌を二期に分け、巻二（148番から155番）の天智の死をめぐる女性達の九首の歌群を第一期とし、浮遊する死者の霊魂に対した「魂呼い」的なものと性格付けする。第二期は、人麻呂歌に代表される公的挽歌で、斎き治められた死者に対する思いが中心となった「魂鎮め」的性格をもつものとされる。そして第一期の后達の歌のもつ基調音に注目し、「魂呼い」的色彩をもつこ

れらの歌のかもす悲しみの情感は、個人の心の深化などという問題とは次元が違い、「女の哭」といった呪術行為の時点での感情吐露から発生したものだ、と解釈されている。

著者も指摘された如く、挽歌のこの分類は、西郷信綱の「柿本人麿」（『詩の発生』所収）の「女の挽歌」の説を援用されたものである。しかし、筆者自身、西郷の「柿本人麿」を読んで感じた疑問を、本書の著者にも投げかけたいと思う。西郷は、その著書の中で巻二の挽歌を(A)私的な挽歌、(B)公的儀礼歌、(C)辞世の歌の三つに分類し、(A)は死者の近親の女が葬送儀礼で哭きつつ歌った、挽歌の最も始原的なもの、(B)は公的儀礼歌が、専門歌人によって歌われたものであると説明した。西郷は、(A)の私的挽歌が、何故(B)の人麻呂の公的挽歌に移行したのか、という問題を、歌い手の分化、挽歌のにない手の職掌化としてしか説明せず、「女の抒情的な私的挽歌」から、「叙事的内容をもつ、人麻呂等の専門歌人の挽歌」というきわめて重要な変質を、エンゲルスの「女の世界史的敗北」を根拠に説明しょうとしている。しかしながら、母権制社会から父権制社会への職掌分化の過程と、その延長上に万葉挽歌の時期を位置づけるのは、歴史的、社会的にかなりの無理があると思われるし、(A)から(B)への変質が歴史的変遷や、職掌の専門化の相とのみ説明されるとは思わない。西郷自身も指摘した如く、(A)私的挽歌と(B)公的挽歌の相違は、各々その継承している伝統のちがいに求められるべきであり、歌のにない手が、男と女にはっきり分けられていることや、抒情的、叙事的といった内容的な相違も、歴史的変遷としてとらえるべきではなく、葬送の場での次元の相違、死のもつ段階的な相違の中にこそ求められるべきであろうと思う。西郷の説を敷衍し、時代的変遷として把握される著者は、こうした問題を、どのように説明されるであろうか。

著者は、葬送実修の中の信仰的な観念の変質にも目を向けている。死から魂の浮遊している期間、そして埋葬までの、「魂呼い」から「魂しずめ」への変化がそれであるが、こうした観念の変質を「哭」「誄」「挽歌」といった実修を例に指摘される。しかしそれだけでなく、この「魂呼い」から「魂しずめ」の変質を、歴史的変遷の中に位置付けようとこころみられている。これは元来歴史を超越すると考えられる民俗的な観念に、歴史的変遷の相を見ようとするもので、注目される。

本章では、きびしい儀礼の場での呪術的制約から解放されると、葬送に関する諸行為は、儀礼から絶縁され、客観視され、それが推敲を繰り返しながら書きとめられる、という記録の要因、法則性が述べられており興味深い。

第五章では、柿本氏とその職掌が述べられる。柿本人麻呂に関しては、万葉集以外、正史にその姿を見ることは出来ない。故に「宮廷歌人」「舎人」「採詩官」と色々に、その職掌についても規定されている。こうした中で、「(柿本のカキは)宮廷領の境界、又は其処を守ることを意味してゐると思はれる」（全集九巻「柿本人麿」四六三頁）「柿本氏が、倭朝廷の遊部又は吉言部(ヨゴト)から出た

であろうということは……」（全集十二巻「上世日本の文学」四四九頁）といった折口信夫の指摘は、暗示的ではあるが、柿本氏に関して重要な問題を孕んでいるように思われる。

著者は、『新撰姓氏録』巻七の記事から、「敏達天皇の御世」が伝承の中核である事、この天皇が、二上山西側の墳墓群第一期の天皇であり、この期が「誄儀礼第一期」に相当する事、人麻呂長歌の基調音が、絶対にもどってこない死者への悲しみの情である事、柿本氏の本貫が、飛鳥の地より西八キロの地点、即ち、葬列が、飛鳥の地から陵墓の地に行きつく中継点として最もふさわしい事、などを根拠として、柿本氏は、貴人の柩を守り、葬送行進で挽歌をうたう「行道歌人」（傍点筆者、一一頁）であったと結論されている。この「行道歌人」としての規定は、きわめて柿本氏の性格を考える上で、きわめて注目すべきものである。更にこの葬送行進曲、「行道歌人」として果した役割は、人麻呂の父、祖父の代で終っていた。人麻呂は、「新しい古代官僚制のなかではじめから下級官吏として位置づけられ」（一二〇頁）「一般官吏として命ぜられるままに作歌活動をつづけていた」（一二〇頁）のであり、「先祖から長く継承してきた伝統的な歌群を文学の域にまでたかめしめ、さらにそれを集約的にかれ自身の歌として定着させ、万葉に記録される最大の契機をなしたのである」（一二〇頁）とされている。こうした記述から、著者は、万葉記載時の人麻呂挽歌に、かなり新しい機能と場を予想されているが、これは、前述の記録性の法則などから、完全に殯宮儀礼、野辺の送りの葬送儀礼の制約から解放され、文学独自の道を歩み出したものと見るべきか、まだ儀礼の制約下にあり、実修に支えられていたのか、などについて、もっと言及していただきたかった。

葬送歌曲のにない手として、他に著者は「笛吹き」も考えられている。

さて挽歌に、柩の綱を引きながらうたう葬送歌曲の意のあることを指摘したのは、古く契沖（『代匠記』総釈）であった。以後、岸本由豆流（『攷証』）や、今日の諸注はこれにならい、「挽歌という名目はもと柩を挽く時の歌の義なりしが、後には汎く喪儀に用ゐる歌の義となり、更に変じて死者を哭ずる詩の一体となりしもの……」（『講義』巻二、一九〇頁）とする山田孝雄の見解や

㈠死葬に際して柩を引きながら歌う事を定めしめられた歌曲

㈡機に応じて作歌された哀悼の歌が霊前にて、哀切な調べを以て歌はれたもの

㈢一般に人の死葬に関して作られた歌（『大成』七巻「万葉集の挽歌」一九七頁）

と分類した久米常民などの説が定説となっている。しかしこれらは、「柩を引く歌」の出典を漢籍に求めた「挽歌名義考」であり、日本における葬送民俗実修として、これを究明したものではなかった。私は、こうしたところに従来の挽歌論の問題点があったと思う。

こうした時、飛鳥から二上山周辺にかけての地理、即ち飛鳥の哭沢神社、四分（よぶ）、新庄の柿本、笛吹、笛堂、竹内街道入口の当麻、河内近くの東条、などに注目し、これに文献史料を添え、殯宮から埋葬地までに

「柩を引く儀礼」を考察し、これを具体的民俗実修として究明されていることは、極めて新しい葬送儀礼の場を提起したものとして注目されると共に、今後の万葉挽歌研究に、新しい視点を示唆するものとして、高く評価される。

著者の論述に従い葬列の後を追ってみたい。

㈠天皇の死、殯宮　飛鳥、哭沢神社

㈡遊部の奉仕による葬送行進の開始　四分

㈢柿本氏の挽歌、笛吹連による葬送行進曲

飛鳥より五、六キロ。竹内越えへの中継点根成柿、奥田、笛堂、柿本

㈣当麻氏、最後の魂しずめ儀礼

二上山附近、当麻坂、当麻

㈤埋葬地での他族民による埋葬儀礼

これが著者によって、地理的にたどられた葬列の全過程である。㈠の飛鳥の地で行われる「魂呼い」的な、大臣達の誄詞、女性の哭泣などが行われた殯宮儀礼が終ると、遺体は㈡の鎮魂に奉仕する遊部達の手に渡り葬列は出発する。遊部達は、幡、楯をもち柩を守る。飛鳥から五、六キロの地点で㈢の柿本氏、笛吹きが、葬送行進曲をかなでる。柿本氏による挽歌の荘重な合唱、笛吹き達による笛、鼓の奏楽がされ、㈣の当麻氏による最後の魂しずめ」儀礼へと移る。

著者は、誄儀礼第三期に当麻氏が、火葬直前の誄を専従的に行っている事から、㈣の当麻坂付近での儀礼を、死出の旅の決定的段階を確定づけるものとされている。そして㈤の他族民による最後の埋葬儀礼に至って、この葬送行進は終りをつづる。

従来名義考として、出典考証の対象でしかなかった「柩を引く」ことは、ここに具体的な葬送実修として、かなり明確に再現されている。勿論史料に記載のない儀礼の復元だけに、推測、論の飛躍のある事はいなめないが、こうした細部の不備は、今後著者によって埋められることは必至であり、本書の評価を低めることはない。

意を尽さぬ不完全な書評であることを、著者に謝したい。特に著者の深い学問的成果である当麻曼荼羅をめぐる論述に触れられなかったのは心残りである。多くの創見を紹介し得ぬ責が、私にあることを最後に付記したい。（昭和四十二年十月十日発刊、学生社版、四八〇円）

『二　上　山』